

## 養成訓練に光を求めて

調査対象校のA総訓校は名古屋市から私鉄で一時間半余はなれたB市にあった。B市は昭和38年に旧4町が合併して市となった人口約75,000人の比較的新しい地方都市である。B市には小学校9校、中学校4校、高等学校1校、私立短期大学1校、総合高等職業訓練校1校が設置されている。市民の一人当り所得は県内13市の内第3位で、市民の教育要求水準も高い。高校進学率は全国平均は勿論のこと、県内平均をも越えている。

このようなB市に設置されているA総訓校は養成訓練として5職種を置き270名の訓練生を、又能力再開発訓練として5職種を置き130名の訓練生を訓練している。

私達の総合高等職業訓練校生素質調査は、A総訓校では昨年度に続き二度目であった。調査は3日間にわたる訓練生に関する各種テストの実施、中学校・県庁訪問等によって行なわれた。諸調査はA総訓校の諸行事とかさなり、A総訓校としては御多忙な時期に行なわれた。しかし、校長先生をはじめ諸先生方並びに職員の皆様の御協力と御援助により、調査の目的を十分果すことができた。このことに対し、まず最初にA総訓校の諸先生方に心より感謝の意を表したい。又職業訓練をめぐる諸問題について貴重な御助言と激励を賜った中学校の先生方並びに〇県庁職業訓練課の方々にも、同様にお礼の言葉を述べなければならない。ここにこれ等諸先生方の御協力と御援助に感謝の意を含め、私の拙い職業訓練印象記を綴ることとする。勿論、この印象記は浅学非才な私の印象記にすぎないことを、はじめにお断りしておきたい。

職業訓練に対する私の印象を要約すれば、それは第一に現在の職業訓練が今なお他の教育訓練に比し、暗い感じを拭い得なかつたことである。その第二に施設設備においても、又人員においても決して十分とはいえない環境の中で、訓練校の諸先生方が明日の社会の担い手を養成すべく、悪戦苦闘しておられる姿に深い感銘を受けたことである。その第三に訓練校の先生方がこれまでの中卒養成訓練を中心とする職業訓練に、大きな危機意識を持っておられたことである。

ところで、私の以上のような印象の中で第三のそれは、今後の職業訓練の発

展にとってきわめて重要な意味を含んでいるように思われる。従って、以下では職業訓練における中卒養成訓練の問題に焦点を絞り、職業訓練印象記を綴ることとする。

A 総訓校の校長先生は「本校の養成課程は設置当初、地域社会から高く評価されたため、中学校から比較的良質の生徒が多数入学してきた」と過去の状況を話された後、しかし、「この良き伝統も高校進学率の上昇傾向に影響されて、その存続を期待することができなくなった」と指摘された。この御意見に対し訓練部長先生も同感され、「この傾向は地域の都市化現象とともに最近特に顕著になってきた」と明言された。両先生の御指摘通り、A 総訓校の統計資料は中卒養成課程への入学希望者がその給源である郡部中学校地域の都市化とともに顕著に減少していることを示していた。

両先生の御指摘は B 市内の D 中学校と郡部の E 中学校を訪問することによって、より明白となった。A 総訓校に卒業生 F 君を送り出している D 中学校は、A 総訓校からほど遠くない愛宕山の麓の眺望の開けた所にあった。D 校では教頭の G 先生、F 君の担任であった H 先生にお会いした。G 先生は指導主事の御経験もあり、教育行政にも造詣の深い先生のようにおみうけした。H 先生は中堅教師として教育活動に御活躍の様子で、F 君の訓練校での生活について諸々質問を受けた。G 先生は D 校の進路指導について、「本校は各種の能力・学力・適性検査による科学的データに基づく進路指導体制の確立に努力している」と述べられた後、「私見ではあるが、自分としては職業訓練校を後期中等教育機関の一種類として位置づけたい」と主張された。この公式見解ともいふべき意見に対し、H 先生は「父兄及び生徒自身が高校進学を希望し、又入学できるような高校が存在する今日、その希望を教師として無視することはできない」と述べられ、現実問題として中学校の進路指導が高校進学指導と同義語になる苦しさを卒直にお話し下さった。両先生のこのようなお話は、私には現在の中学校教師の進路指導に対する最大公約数的な御意見のように思われた。D 校の高校進学率は昭和 45 年度では約 90% で、今後もその上昇が予期されている。その当否は別としても、D 校の進路指導は結果として学校選別高校進学指導以外の何物でもないようにおみうけした。

このような傾向は I 訓練生の出身中学校の郡部の J 中学校においては、より

顕著であった。J 中学校は口の字型四階建て鉄筋校舎で冷暖房完備の最新設備を容する学校であった。その施設設備の立派さは私を驚かせるのに十分であった。J 校の進路指導についてK 教頭先生は「本校の地域社会は比較的経済的にも豊であり、父兄及び生徒の高校進学熱はきわめて高い。従って、昭和45年度の高校進学率は97%に上昇し、生徒の進学先高校も県内有名高に相当数進学している」と自慢されていた。確かにJ 校の学校要覧はこのことを示していた。このような学校でI 君がA 総訓校に進学した理由をお尋ねすると、L 先生は「特に担任教師として訓練校進学を指導した記憶はない。多分友人にすすめられたのではないでしょうか」との御返事であった。K 教頭先生に進路指導についてお尋ねすると、「職業訓練校は確かに一般論として後期中等教育機関の一種類として認めることはできる。しかし、それが制度として存在し得ても現下の地域社会の高校進学率の高まりを前にして、その善悪は別としても、中学校教師が職業訓練校を進路指導の一要素として考えなければならない必然性はない。又父兄も中学校教師にそれを考えるように要求もしない」との御返事であった。

D 中学校及びJ 中学校における以上のような進路指導の実態は、中卒養成訓練を中心とする職業訓練の限界を示す典型的な事例である。勿論、私はこのような中学校の進路指導体制に対し幾多の疑問を感ずる一人である。しかし、それにもかかわらず今日の日本の社会構造に根ざした高校進学率の上昇と高校教育の準義務化を前にして、今後の職業訓練がなお中卒養成訓練中心を固守する限り、職業訓練の未来はないように思われた。

このような私の印象を卒直にA 総訓校の校長先生にお話すると、校長先生は「今後の職業訓練は高卒養成訓練がコースとして緊急に考えられなければならない」と主張されながらも、しかし、「現在の訓練校の体制のままで安易に高卒養成訓練に転換することは危険である」と指摘された。このことを訓練部長先生は「本校においても高卒者が近年10名内外入校しているが、しかし彼等の内優秀な訓練生は本校のメニューに合わず、数カ月にして退校して行く」と指摘され、具体的に問題の所在を示された。つまり、両先生は「今後の養成訓練の死活は高卒訓練にあるとしても、中卒から高卒への安易な転換は、決して職業訓練の未来に通ずる方途ではない。高卒養成訓練がコースとして真に社会

的コンセンサスを得、社会的評価を獲得するためには、養成目的・訓練内容・指導員・施設設備・職業訓練行政組織がまず最初に抜本的に改革されなければならない」と主張されているように思われた。このような御意見を拝聴した後 A 総訓校の P・R 担当者の「私が高校へ P・R に行きますと、まず質問されることは訓練内容・教授スタッフ・施設設備です。正直に訓練校の実態をお話すると、高校の先生方は訓練校を高校以後の一進路として考えていただけないように感じた」という体験談は、私に訓練校の先生方の苦悩を痛いように感じさせる話であった。

中卒養成訓練の限界と高卒養成訓練への転換をめぐる諸問題について、以上のような知見を得た後、私は専修訓練校の実態を調べるべく、C 県庁職業訓練課にお尋ねした。予期していた通り、専修校が当面している事態は総訓校のそれよりもはるかに深刻であった。専修校は高校進学率の上昇の影響をもろに受け、まさに破産しつつあった。M 課長さんのお話によれば、「この問題に対処するために、最近知事部局へ職業訓練課としての改革プランを提出したところである」とのことであった。ここではこの改革プランの詳細については省略するが、ただ諸改革の一つとして短大レベルの職業訓練の実施が意図されていることを付言しておく。

以上、今回の調査による拙い職業訓練印象記を特に中卒養成訓練の問題にのみ焦点を絞り、書き綴ってみた。勿論、職業訓練の問題は養成訓練のそれにつきるものではない。特に生涯教育が呼ばれている今日、それとのかかわりにおいても職業訓練を再検討しなければならない。しかし、この問題については他日を期すことにして、職業訓練の明日への発展を念じつつ、ひとまずここでペンを置くことにする。